

# 蜀漢・蔣琬政權の北伐計畫について

満田剛

## 目次

はじめに

蔣琬政權の軍事政策と年譜

蔣琬の戦略と蜀漢・呉「同盟」

延熙六年—蔣琬政權の實質的終焉

終わりに—陳壽の「蜀漢國史觀」に関する一考察

## はじめに

蔣琬の北伐計畫については、先行研究に計畫の存在についての指摘はある<sup>1</sup>ものの、管見の限り王夫之『讀通鑑論』以外に詳細な考察は存在していない。その『讀通鑑論』卷十・三國では、次のように述べられている。

蔣琬改諸葛之圖，欲以舟師乘漢、沔東下，襲魏興、上庸，愈非策矣。魏興、上庸，非魏所恃爲巖，而其贅餘之地也。縱克之矣，能東下襄、樊北收宛、雒乎？不能也。何也？魏興、上庸、漢中東迤之餘險，士卒所憑以阻突騎之冲突，而依險自固，則出險而魂神已憊，固不能踰閫限以與人相搏也。且舟師之順流而下也，逸矣；無與遏之而戒心弛，一離乎水而衰氣不足以生，必敗之道也。先主與吳共爭于水而且潰，況欲以水爲勢，而與車騎爭于原陸乎？魏且履實地，資宿飽，坐而制之于丹、涪之涓，如蛾赴焰，十捕而九亡矣。

劉裕之溯河、渭以入關中，王鎮惡等以步騎馳擊，而舟師爲其繼，非恃舟師以爭人于陸也。姚泓恃拓拔氏爲之守，拓拔氏不爲泓守，而泓弛其防，故獲利焉，非獨倚舟師之利攻人于千里之外也。諸葛之出祁山，以守爲攻，即以攻爲守，知習于險者之不利于夷，且自固以待時變，特不欲顯言之以怠眾志耳。琬移屯而東西防遂弛，鄧艾陰平之禍，自琬始矣。琬疾動而不能行，司馬懿方謀篡而未暇，故蜀猶以全。不然，此一舉而蜀亡不旋踵矣。

これを見ると、王夫之は「曹魏にとって魏興や上庸は贅餘の地であり、勝ちとったところでさらに襄陽や樊城、宛や洛陽を奪うことはできない」と述べ、かなり手厳しい評価を下している。さらに「蔣琬が魏興・上庸攻略戦を行うことができず司馬懿が篡奪の謀に忙しかったために蜀漢が維持された」とし、「蜀漢滅亡の際に陰平を鄧艾に破られてしまう元凶は蔣琬にある」として、蜀漢滅亡の原因の一部を蔣琬に歸している。蔣琬の北伐計画は、このような王夫之の見方の通りなのであるだろうか？

また、陳壽『三國志』から見た蔣琬政権の成立過程とその性格については、すでに拙稿で論じた<sup>2</sup>が、そこでも指摘したように中林史朗氏は延熙元年の詔勅の

須吳舉動，東西掎角，以乘其釁。

という一文を受けて、蜀漢が呉の動きを「主」とし、自らは「従」の立場をとるようになったとし、また諸葛亮の死後に生死を賭けるような戦闘が行われなかったことから、諸葛亮の死に伴って蜀漢政権は理念上終焉したと述べている。また、渡邊義浩氏も蜀漢が益州土着政権と化して正統性を失っていくことへの配慮をしたため蔣琬の北伐が計画されたとしている<sup>3</sup>。果たして、蔣琬の北伐は呉の動きを「主」とし蜀を「従」としていたのであるだろうか？また蔣琬の北伐は政権の正統性への配慮のためだけに計画されたのであるだろうか？本當に諸葛亮の死でもって理念上でも蜀漢政権は終焉してしまっていたのであるだろうか？

以上のような問題意識を踏まえて、本論文では陳壽「三國志」本文及び裴松之注（以下、「裴注」と略す）に依據して蔣琬政権の時期の年譜を作成し彼の

北伐計畫について確認するとともに、陳壽『三國志』から見た蔣琬政權の性格と彼の「蜀漢國史觀」について言及していきたいと考えている。

## 蔣琬政權の軍事政策と年譜

蔣琬政權の政策と當時の蜀漢の動きを見るために、建興十二年(234年)に諸葛亮が亡くなってから蔣琬がこの世を去る延熙九年十一月までの年譜を作成した(〔表1〕蜀漢を中心とした三國の動向と天災・異民族反乱(234年8月~246年11月))<sup>4</sup>。

まずはっきりとわかることは、先行研究でも指摘されているところであるが、確かに蔣琬政權下での大規模な軍事行動がほとんどなかったことである<sup>5</sup>。しかし、彼はただ単に國力恢復と内政充實に努め、守りに徹していたわけではなかったようだ。

延熙元年(238年)に蔣琬は劉禪の詔勅を受けて漢中に出陣して開府している。諸葛亮の死後、漢中は呉懿と王平に任されていたが、政權首班が漢中で指揮を執る體制が再び整えられ、北伐の準備に入ったのである。この直前に遼東で公孫淵が魏に叛旗を翻したことも北伐への好機と捉えられた可能性がある。

この頃から、蔣琬の北伐計畫が具體化してきたと考えられる。この計畫については『三國志』卷四十四蔣琬傳に記されている。

琬以爲昔諸葛亮數闚秦川，道險運艱，竟不能克，不若乘水東下。乃多作舟船，欲由漢、沔襲魏興、上庸。會舊疾連動，未時得行。而眾論咸謂如不克捷，還路甚難，非長策也。於是遣尚書令費禕、中監軍姜維等嚮指。

陳壽のこの文章をそのまま受け入れると、蔣琬には北伐をやる気がなかったわけではなく、むしろ積極的であったことになる。北伐は蜀漢建國以来の國是である。蔣琬は劉備・諸葛亮の遺志をそのまま受け継ぎながらも、諸葛亮とは異なった戦略をとろうとしていたのである。

魏の正始二年、呉の赤烏四年、そして蜀漢の延熙四年(241年)、漢中にあっ

た蔣琬は漢水・沔水を下って魏興・上庸攻略を目指して軍を進めようとした<sup>6</sup>。實は、この蔣琬の計畫を實行しようとした前後に、『三國志』卷四十四姜維傳に

琬既遷大司馬，以維爲司馬，數率偏軍西入。

とあり、また『華陽國志』卷七劉後主志にも

輔漢將軍姜維領大司馬〔司馬〕，(是歲)西征入羌中。

とあるように、蔣琬は延熙二年をはじめとして西方の地理に明るかったであろう姜維をたびたび涼州方面へ出撃させている。それも「大司馬府の司馬」として、である。これは「姜維が蔣琬の指示の下に西方に出撃した」ということを意味する。この時期の蔣琬と費禕・姜維の間には少なくとも官職上では比べ物にならないほどの差があり、蔣琬は諸葛亮のような官職と権力を握っていた。<sup>7</sup>また、蔣琬は後に政權首班となった費禕のように、姜維をおさえきれないから兵を小出しにして出撃させているわけではないと考えられる<sup>8</sup>。以上の點を踏まえて考えると、この時期の姜維は魏興・上庸攻略戦を念頭に置いた別動隊を指揮していたと考えるのが適切であろう。「それまで諸葛亮が北伐を行ってきた魏の雍州・涼州方面へこれからも蜀漢の北伐が行われる」と魏へ印象付ける牽制として派遣されたものと思われる。

しかし、結局蔣琬の魏興・上庸攻略計畫は中止に追い込まれてしまう。北伐中止の理由について考える際に、『三國志』蔣琬傳にある記述によく注意して見る必要がある。重複するが、もう一度引用したい。

會舊疾連動，未時得行。而眾論咸謂如不克捷，還路甚難，非長策也。

この文章を見ると、まず先に蔣琬の持病が起こったために實行できず、續いて反對派が多數であったとされている。この陳壽の文章からすると、北伐中止の主要因は蔣琬の病であり、それが引き金となって劉禪の聖旨が下されたと考えられる。つまり、蔣琬の病がなければ、押し切って北伐を行う可能性があったということになる。

ところで、漢水・沔水を下って魏興・上庸を狙うという蔣琬の北伐計畫に限らず、そもそも蜀漢の北伐計畫にとって重要な要素は呉の動きである。蔣

琬の漢中への出陣、開府に際して、先に引用した『三國志』卷四十四蔣琬傳にある劉禪の詔勅の「呉の舉動を須ちて」という一文もある。

そこで、蔣琬の北伐計畫が實行されかけた延熙四年の呉の軍事行動を確認しておきたい。『三國志』呉書本文と裴注を見ると、蔣琬の北伐計畫の記載があるこの年に確かに呉も魏への軍事行動を敢行していたことがわかる。『三國志』卷四十七呉主傳（以下、「呉主傳」と略す）には

四年……夏四月、遣衛將軍全琮略淮南，決芍陂，燒安城邸閣，收其人民。威北將軍諸葛恪攻六安。琮與魏將王淩戰于芍陂，中郎將秦晃等十餘人戰死。車騎將軍朱然圍樊，大將軍諸葛瑾取柤中。五月，……是月，魏太傅司馬宣王救樊。六月，軍還。

とある。この件について『三國志』卷四齊王紀には

二年……夏五月，呉將朱然圍襄陽之樊城，太傅司馬宣王率衆拒之。六月辛丑，退。

とあり、この文章に注されている干寶『晉紀』には

呉將全琮寇芍陂，朱然、孫倫五萬人圍樊城，諸葛瑾、步騭寇柤中；琮已破走而樊圍急。宣王曰：「柤中民夷十萬，隔在水南，流離無主，樊城被攻，歷月不解，此危事也，請自討之。」議者咸言：「賊遠圍樊城不可拔，挫于堅城之下，有自破之勢，宜長策以御之。」宣王曰：「軍志有之：將能而御之，此爲糜軍；不能而任之，此爲覆軍。今疆場騷動，民心疑惑，是社稷之大憂也。」六月，督諸軍南征，車駕送津陽城門外。宣王以南方暑溼，不宜持久，使輕騎挑之，然不敢動。於是乃令諸軍休息洗沐，簡精銳，募先登，申號令，示必攻之勢。然等聞之，乃夜遁。追至三州口，大殺獲。

とある<sup>9</sup>。

五月、呉が動き始めた。衛將軍全琮が芍陂に侵入し、威北將軍諸葛恪は六安を攻め、車騎將軍朱然らの率いる五万の軍勢が襄陽郡の樊城を包圍、大將軍諸葛瑾・驃騎將軍步騭が柤中に侵入したのである。それに對して魏は、王淩・孫禮・胡質らを派遣して防ぎとめた。全琮が退却した後も樊城の包圍は厳しかったため、六月に司馬懿自らが出陣して朱然らを撃退したのである。

『三國志』卷二十四孫禮傳には

明帝臨崩之時，以曹爽爲大將軍，宜得良佐，於床下受遺詔，拜禮大將軍長史，加散騎常侍。禮亮直不撓，爽弗便也，以爲揚州刺史，加伏波將軍，賜爵關內侯。吳大將全琮帥數萬眾來侵寇，時州兵休使，在者無幾。禮躬勒衛兵禦之，戰於芍陂，自旦及暮，將士死傷過半。禮犯蹈白刃，馬被數創，手秉枹鼓，奮不顧身，賊眾乃退。詔書慰勞，賜絹七百匹。禮爲死事者設祀哭臨，哀號發心，皆以絹付亡者家，無以入身。

とあり，魏の側にとっても全琮の軍を防禦することが楽なことではなく，干寶『晉紀』において議者が述べているような樊城防衛に関する對應には問題がなかったとは言い切れないことが理解できる<sup>10</sup>。

魏の正始二年當時の司馬懿は『三國志』卷四齊王紀に

景初三年……丁丑詔曰：「太尉體道正直，盡忠三世，南擒孟達，西破蜀虜，東滅公孫淵，功蓋海內。昔周成建保傅之官，近漢顯宗崇寵鄧禹，所以優隆雋乂，必有尊也。其以太尉爲太傅，持節統兵都督諸軍事如故。」

とあるように，節を与えられてそれまでどおり軍事を取り仕切ることを認められてはいたとはいえ，曹爽によって太傅に祭り上げられていた。その司馬懿が，この時の呉の進攻に際しては自ら望んで樊城に出陣したのである。彼によると「現場（樊城）に指揮する者がいないうえに，遠隔統御では國家の大難を乗り切ることができないため」ということになる。確かに遠隔操作では軍の指揮が非常に難しくなるし，迅速な對應ができないであろう。その上，呉の遠征軍も大將軍諸葛瑾，驃騎將軍步騭，車騎將軍朱然，衛將軍全琮，威北將軍諸葛恪という錚々たる將軍をそろえていた。加えて，その背後に荊州の抑えとして控えているのが呉の切り札とも言える上大將軍陸遜となれば，魏にとって確かに「國家の大難」であったろう。だが，理由はそれだけだろうか？ 名誉職に祭り上げられた司馬懿が出撃するのは，どう考えても尋常ではない。

呉は荊州の樊城を攻め，蜀漢はそれまでとは戦略を変えて漢水・沔水を下って同じ荊州の魏興・上庸を攻略しようと水軍を動かし始めていた。しかも，

漢水をさらに下っていけば、その先は襄陽・樊城に通じていた。以上のことから考えると、蔣琬は、蜀漢と呉による荊州における直接的な對魏挾撃作戰を思い描いていたのではないだろうか。假にも諸葛亮の衣鉢を受け継いだ蔣琬ともあろう者が、蜀漢單獨で北伐をするような勝ちめのない戦いはしなかったであろう。諸葛亮以来の傳統的な軍事・外交政策の要である呉との同盟關係を駆使し、諸葛亮政權期とは違い直接的に荊州において魏を挾撃する—これが彼の作戰だったのではないだろうか。蜀漢の側からすると、魏興・上庸からそのまま漢水を下って樊城に至って呉軍と合流もできる。樊城から新野、そして魏の都洛陽はそれほど遠くない。諸葛亮の北伐以降、數少ない勝機を何とか見出そうとしてこのように「呉の舉動を須」つような荊州における直接的な對魏挾撃戰略を取ったのであろう。

しかし、どうやら蔣琬と呉の間には事前協議が行われていなかったようである。『呉主傳』裴注『漢晉春秋』には、零陵太守の殷禮の上書として、

零陵太守殷禮言於權曰：「今天棄曹氏，喪誅累見，虎爭之際而幼童蒞事。陛下身自御戎，取亂侮亡，宜滌荊、揚之地，舉彊羸之數，使彊者執戟，羸者轉運，西命益州軍于隴右，授諸葛瑾、朱然大衆，指事襄陽，陸遜、朱桓別征壽春，大駕入淮陽，歷青、徐。襄陽、壽春困於受敵，長安以西務對蜀軍，許、洛之眾勢必分離；掎角瓦解，民必內應，將帥對向，或失便宜；一軍敗績，則三軍離心，便當秣馬脂車，陵蹈城邑，乘勝逐北，以定華夏。若不悉軍動眾，循前輕舉，則不足大用，易於屢退。民疲威消，時往力竭，非出兵之策也。」權弗能用之。

とあり、また『呉主傳』の步騭・朱然の上疏には、

七年春正月……是歲，步騭、朱然等各上疏云：「自蜀還者，咸言欲背盟與魏交通，多作舟船，繕治城郭。又蔣琬守漢中，聞司馬懿南向，不出兵乘虛以掎角之，反委漢中，還近成都。事已彰灼，無所復疑，宜爲之備。」權揆其不然，曰：「吾待蜀不薄，聘享盟誓，無所負之，何以致此？又司馬懿前來入舒，旬日便退，蜀在萬里，何知緩急而便出兵乎？昔魏欲入漢川，此間始嚴，亦未舉動，會聞魏還而止，蜀寧可復以此有疑邪？又人家

治國，舟船城郭，何得不護？今此間治軍，寧復欲以禦蜀邪？人言苦不可信，朕爲諸君破家保之。」蜀竟自無謀，如權所籌。

とある。孫權は「蜀漢が寝返って魏と同盟を結ぼうとしている」という歩騭・朱然の上疏には心を動かされることもなく、「蜀にはそうした企てがない」と判断し、実際その推察どおりであった、と記されている。

これらからわかることは、「蜀漢は諸葛亮在世時のように隴右へ出撃する」というのが呉の朝廷における蜀漢の戦略に対する見解であったということである。つまり、蔣琬は公式には呉との事前協議は行っていなかったのである。

ただ、これは蜀漢内部のことを考えれば納得できることかもしれない。次章でも述べるが、蜀漢内部の意見は蔣琬の戦略に反対であり、それ以上に蔣琬自身が病に倒れていたのである。そんな状態で呉に対してはっきりした約束はできなかったと思われる。それに、呉がいかにあてにならないかは諸葛亮存命のときから理解できたことであろう。このことが呉と連携を取っていなかった理由のひとつではないかと思われる。

とはいえ、蔣琬の漢中出陣の際に劉禪が下した詔勅に呉の動きと呼應して出撃せよとあることからすると、蔣琬は事前協議をしていなかったとしても呉の出撃を意識しながら北伐を進めようとした可能性が指摘できる。また、殷禮や歩騭・朱然は知らなかったとしても呉と蜀漢の同時出撃案について孫權は知っていた、もしくは隠密裏に蔣琬との事前協議を行っていた可能性も否定できない。

司馬懿は呉や蜀漢のこれらの動きを見て動いた可能性もある。もし樊城が落とされれば、それだけでも魏は危機に陥るのに、それに加えて蜀漢が荊州に向けて動き始めている。挟撃作戦を未然に絶つために“太傅”の司馬懿がわざわざ出陣したと見ることはできないだろうか。

## 蔣琬の戦略と蜀漢・呉「同盟」

ここまで述べたことから把握できる蔣琬の戦略の特徴として、戦略の地理

的中心が涼州方面から荊州方面に移っていることが指摘できる。ただ、これは諸葛亮の北伐以前の荊州をめぐる争奪戦に再び足を踏み入れようとしていたことを意味していると思われる。

そもそも荊州の地は曹操の南下以降三國が争奪を繰り広げた地であり、当時の軍事的要衝であったことは否定できないであろう。この地をめぐる三國は微妙な駆け引きを繰り広げていたが、その中で蜀漢は關羽の敗死にはじまり、張飛・劉備をはじめ幾多の将兵とともに、結局荊州を失うこととなった。諸葛亮は呉との外交では協調路線を取り、魏への攻撃は荊州方面へは出ないで、漢中から長安以西を狙う戦略を取った。もっとも、第一次北伐では新城を治めていた孟達を勧誘しており（結局、司馬懿に阻まれてしまった）<sup>11</sup>、荊州方面へ出ようとしなかったわけではない。とはいえ、呉と争ってでも荊州方面に出ようとはしなかったことは疑いない。

しかし、蔣琬の戦略は「それまで諸葛亮が北伐を行っていた西北方面に姜維を派遣し牽制させておいて、主力は漢水・沔水を下る」というもので、しかもその戦略は呉の朝廷も（少なくとも公式には）把握していないものであった。先に述べたように、呉の將帥は、蜀漢の蔣琬が軍事同盟の発動に際して諸葛亮と同様に漢中から北上すると考えていたのである。ということは、蔣琬の戦略は敵國の魏だけでなく同盟國の呉の豫想も覆して、結果として呉と荊州を挟撃し、一部であっても荊州を奪うという「漁夫の利」を得て、戦局を打開しようとしたという見方ができる<sup>12</sup>。

また、それまではあてにならなかった呉の戦略に蜀漢は苦しめられてきたわけであるが、荊州方面に戦略の中心を移すことで真の意味での共同作戦が可能となり、それによって（少なくとも）戦局を変化させようと蔣琬は考えたのではないだろうか。

しかし、結局荊州への出撃は未遂のまま終わってしまった。蜀漢は本格的に動くことはできなかったのである。しかも、先に引用した文章の通り、北伐中止の聖旨を蔣琬に傳えたのはなんと後繼者となっていく費禕と姜維だったのである。彼らが蔣琬を「さとすに及び」<sup>13</sup>北伐を中止させたのである。

彼らが蔣琬の北伐を推進する側にいたかどうか、はっきりとしたことはわからない。ただ、裴注に引用された史籍ではあるが、「三國志」卷四十四姜維傳裴注所引「漢晋春秋」には

吾等不如丞相亦已遠矣，丞相猶不能定中夏，況吾等乎！且不如保國治民，敬守社稷，如其功業，以俟能者，無以爲希冀微倖而決成敗於一舉。若不如志，悔之無及。

とある。政權首班となつてからの費禕がはやる姜維を抑えるための発言だが、これに加えて、「三國志」卷四十五姜維傳にあるように費禕は姜維に常に一萬人以上の兵を与えなかったことから、蔣琬没後の費禕の方針は専守防衛であったことがわかる。このことから考えると、彼が蔣琬の北伐を推進していたかどうかは非常に疑わしい。

一方、姜維はどう考えていたのだろうか。費禕の没後、彼が中心になって内政も顧みないような北伐が度々行われるが、そのルートはいずれも諸葛亮北伐のルートとさして変わらない。どうやら諸葛亮の北伐ルートに對するこだわりと西北方面の地理をよく知っているという自負がこれにからんでいるようである。加えて、先にも指摘したように、姜維は魏興・上庸攻略戰の別働隊を指揮していた可能性が高い。以上のことからすると、姜維も蔣琬の北伐を積極的に推進する側であったかどうかはわからないが、仮に反對であってもそれは侵攻ルートに對する反對であつて、北伐自體に對する反對派ではないところが費禕とは違ふところである。

ただ、少なくとも言えることは、蔣琬の北伐に際して費禕と姜維は少なくとも主たる役割を担つておらず、(特に費禕は)ともすると反對派であつた可能性があるということがわかる。

ここまで述べてきたように、蔣琬に北伐の意志はあり、行動にも移したわけであるが、諸事情のため本格的に北伐を強行することはできなかった。蔣琬が病に倒れたり、それもからだのためであろうが北伐反對派を抑えることができなかつたりした。さらに、こちらのほうが重要かもしれないが、諸葛亮の死による國內の動搖を静め、なおかつ北伐を同時に遂行しなければなら

なかった苦しさがあった。

蔣琬政權においても諸葛亮政權と同様、統一に向けての北伐を敢行するという蜀漢國の國是を果たす「正統な後繼者」たらんとした蔣琬と「蜀の地を守ってくれるだけでいい」という巴蜀の豪族達との間の相克がくすぶり續けていたと考えられる。ただ、蔣琬が軍を握り、諸葛亮の基本政策をほとんどそのまま受け継いだ政治を行っていたために、豪族達も表立った非難は起こせなかったのであろう。

蔣琬政權の特徴を整理すると、諸葛亮政權のように首班の蔣琬一人に権力が集中しており、獨裁ともいえるような状況であったことがまず指摘できる。しかし、蔣琬自身に諸葛亮のような“絶対権力”を築こうという意志があったかどうかはわからない。彼は益州刺史の役職を就任当初から譲りたがっていたし、自ら望んで得た獨裁的な“絶対権力”ではなかったことを考えると、むしろ、その氣がなかったといった方がいいのかもしれない。<sup>14</sup>加えて、これも諸葛亮と同様であるが、蔣琬は漢中に開府し「漢中に進駐しながらも成都朝廷を完全に掌握し、内政・對孫呉外交をリモートコントロールし」<sup>15</sup>ていたと考えられる。

このような體制の中で、董允の存在が大きなものであったことが指摘できる。諸葛亮は彼を侍中に任命していたが、彼は劉禪を監視し、「出師表」にある“宮中府中俱に一體たり”という方針を現實のものとしていたと考えられる。實際、彼が活着している間は劉禪が安逸に耽ることもなかった。だからこそ官職は蔣琬・費禕とは比較にならないが、諸葛亮・蔣琬・費禕とともに四英・四相と評された<sup>16</sup>のであろう。董允は蔣琬とほぼ同時期に死去している。宮中の要職にある人間で劉禪の享樂への陶醉を遮るものがなくなったことを意味していたと見られる<sup>17</sup>。

## 延熙六年—蔣琬政權の實質的終焉

延熙六年十月、蔣琬は漢中から涪に歸還する。そして十一月、蔣琬政權に

においては延熙元年の改元以来の大赦が行われ<sup>18</sup>、その直後費禕は大將軍録尚書事に昇進した。蔣琬が政務を果たせなくなったからであろう。この時点で蜀漢帝國の實権は費禕に移り、蔣琬政權は終焉を迎えたのである<sup>19</sup>。

これ以降、費禕が政權首班となった政權が成立するが、その政權には諸葛亮政權や蔣琬政權との明確な違いがあった。先にも指摘したように、諸葛亮政權や蔣琬政權では政權首班者のみに官職上の権力が集中していたが、『三國志』卷四十四姜維傳に

〔延熙〕十年，遷衛將軍，與大將軍費禕共録尚書事。

とあるように、録尚書事に就任した人物として費禕だけでなく姜維が存在していた（蔣琬が没した翌年〔247年〕に就任）ことである。このことを重視すれば、蔣琬没後の蜀漢は費禕・姜維政權によって担われたことになる。また、『三國志』卷三十三後主傳裴注所引『魏略』には

琬卒，禕乃自攝國事。

とあることに加えて、費禕が漢壽に開府したのは延熙十五年（252年）になってからである<sup>20</sup>。これらの記事も考慮すると、費禕・姜維政權では諸葛亮・蔣琬のような独裁的な権力を掌握した人物がいなかったということになりそうである。

これ以降の費禕と姜維の政治姿勢は、劉備・諸葛亮・蔣琬の三代に比べると、非常に極端であり柔軟性を欠いたものである。費禕・姜維政權の中でも、費禕は守勢化してしまい、對して姜維は北伐に積極的な姿勢を示している。この二人の方向性の對立の中で、蜀漢は滅亡への道を走り始めることとなる。

蜀漢がこの世に存在し続けるためには、何のために蜀漢という國が存在しているのかを常に問い続けることを怠ってはならなかったのである<sup>21</sup>。それは単に「漢王朝を復興する」だけでは説得力を持たず、諸々の人々のためであることを行動で示さねばならなかった<sup>22</sup>。費禕の場合は、外征を控えることで魏に勝つための可能性を絶ってしまった。姜維の場合は理念が先走ったためか、少なくとも結果として「軍の軍による軍のための戦争」と言われても仕

方ないような北伐を頻繁に行ったのである。彼らは蜀漢國存在の意義である「漢朝復興」という國是・建國理念を本気で行動に移そうとしていたのであるうか。

このように見ると、蔣琬の死によって諸葛亮の「正統な後繼者」が蜀漢から姿を消し、蜀漢自體がその存在意義ともいえる國是と建國の理念を忘れ去ってしまったと考えられる。そして、それが決定的となった年が延熙六年だったのである。

蜀漢國において、劉備・諸葛亮・蔣琬と三代にわたって國是・建國理念が受け継がれていた時代は、様々な問題を抱えながらも國家としてのまとまりを見せており、一面から見れば盤石の状態であった。しかし、國是を有名無實化してしまった費禕・姜維の時に政策の極端化がおこり、國を滅亡に導いてしまった。

蔣琬治世の十二年間は、蜀漢が劉備・諸葛亮以来の國是を形骸化し忘れ去る過程であった。蔣琬は、“漢朝復興”という建國の理想をそのまま受け継ごうとした、いわば“正統な後繼者”であった。費禕・姜維政權の時代には、諸葛亮政權時代のような本格的北伐を行う意圖すらなかったことを考えると、諸葛亮が後繼者として第一に蔣琬を指名したのは、真の後繼者が蔣琬しかいないと判断したためであろうか。

## 終わりに—陳壽の「蜀漢國史觀」に関する一考察

蔣琬政權期における魏への軍事行動はほとんどなかったが、延熙四年(241年)の動きに見られるように蔣琬の北伐計畫は諸葛亮とは異なっているものであった。蔣琬の計畫は「それまで諸葛亮が北伐を行っていた西北方面に姜維を派遣し牽制させておいて、漢中から魏興・上庸に向けて漢水・沔水を下る」というもので、当時の呉の北伐の動き(こちらは実際に軍事行動を起こした)も考慮すると、共に襄陽・樊城を狙う目的があったと考えられる。ただし、呉との間には事前の協議は無かったようで、蜀漢は呉の動きに便乗する形で

攻撃を謀ったように見受けられる。魏の側ではこの年の呉の軍事行動に対して太傅となっていた司馬懿が反対意見を退けて自ら出陣して防いでいるが、これは呉の動き以外にも蔣琬の計畫に気づいていたためである可能性もある。しかし、結局蜀漢は蔣琬の病と多数の北伐反対派の意見によって北伐を敢行できず、費禕と姜維が蔣琬を論して断念させたのである。

蔣琬政権の特徴としては諸葛亮政権のように首班の蔣琬一人に権力が集中しており、獨裁ともいえるような状況であったこと、蔣琬は漢中に開府しながらも内政・對孫呉外交をリモートコントロールしていたことが挙げられる。對照的に、蔣琬没後の費禕が首班となった政権では、録尚書事に費禕だけでなく姜維も就任していることや（『魏略』によると）蔣琬没後は劉禪が自ら國事を攝ったこと、費禕が開府したのは首班となってから六年後の延熙十五年であったことから、官職や権限で費禕が優位を保っていたとはいえ費禕・姜維政権というべき二頭體制であったこと、諸葛亮・蔣琬のような独裁権力を掌握していた人物がいなかったことが指摘できる。

『三國志』卷四十四の評を見ると蔣琬と費禕は同様に扱われており、ともに諸葛亮の規範を受け継いで方針を改めなかったとある。しかし、『三國志』蜀書の内容をよく見ると、諸葛亮・蔣琬の政権と費禕・姜維の政権との間には明らかに相違点がある。諸葛亮・蔣琬には（少なくとも官職上の）“絶対権力”と北伐への意志と内政を掌握した上での戦略があったが、費禕・姜維には官職上でも“絶対権力”がなく、北伐に関しても費禕は消極的であり、姜維は内政を顧みない軍事行動を起こすなどの偏りを見せている。このように見ると、陳壽による蜀漢國史觀では、諸葛亮・蔣琬の政権の性格が類似しており、蔣琬一人が「諸葛亮の正統な後継者」であるのに對して、費禕や姜維の政権は諸葛亮や蔣琬の政権とは性格が異なっているだけでなく、陳壽の本文を見ていると諸葛亮の政策を受け継いでいない政権として描かれ、滅亡への階段を歩いていく過程が示されているように見受けられる。陳壽の「蜀漢國史觀」については、費禕・姜維政権期から蜀漢の滅亡に至る歴史を陳壽「三國志」から見ておく必要があると思われるが、これに関しては稿を改めて述べてい

きたいと考えている。

1 王仲荦『魏晉南北朝史』上册95～96頁には

在蔣琬執政的十二年中（公元二三四—二四六年），蜀漢沒有大舉北伐。蔣琬雖有自漢中乘漢水東下襲擊曹魏的打算，但由於朝野間的議論，認為漢水淺急，如果出兵不能取勝，撤退時就會遇到困難，怕重蹈猓亭之敗的覆轍，因此沒有進軍。

とある。また、尹鈞公「談蜀國滅亡的原因」（『文史哲』1982-5 1982年），中林史朗「試論，蜀漢政權の成立過程と其の存在意義—ドラマとしての三國鼎立」（以下，「中林前掲論文」と略称）（『土浦短期大學紀要』14 1986年），渡邊義浩「蜀漢政權の支配と益州人士」（『史境』18 1989年，『三國政權の構造と「名士」』汲古書院2004年 第2章第2節「蜀漢政權の支配と益州社会」）にも蔣琬の北伐計畫に関する記述があり，それについては拙稿「諸葛亮歿後の「集團指導體制」と蔣琬政權」（以下，「拙稿1」と略称）（『創價大學人文論集17 2005年』）でも指摘している。

2 拙稿1参照。

3 ちなみに羅開玉〔新撰〕『三國志』（『二十五史新編』上海古籍出版社 1997年）にも

蔣琬對北伐之事并不怎么認真，但也擺出架式，率軍出屯漢中。とあり，蔣琬は北伐をする構えを見せただけで，實行する氣はなかったとされている。

4 魏の景初年間については，平勢隆郎「景初の年代に関する試論」（池田温〔編〕『日中律令制の諸相』東方書店 2002年）がある。ここでは，景初改元の特殊性を指摘して，景初元年が實際は237年で景初は四年までであったこと，そのため青龍四年は最初にはあったが景初改元で削られ，それが正始改元の後で復活したこと，正始改元の後には暦が書き換えられて237年があらためて景初元年とされて，景初は三年までとされたことと述べられている。本論文の年譜はこの平勢氏の説には依據していないが，注意する必要があると考えている。

5 『晉書』宣帝紀には，建興十三年（235年）に馬岱が魏に侵攻して牛金に撃退されたとあるが，『三國志』にはそのような記事はない。また，本文中で指摘したように姜維がしばしば涼州へ侵攻していた。

6 『三國志』卷四十四蔣琬傳によると，蔣琬は延熙元年から船の建造などの準備を開始している。このことや，『三國志』の記述を踏まえると，魏興・上庸攻略へ向けて具体的な行動にできるようになるのは延熙三年～四年頃だと考えられる。ちなみに，『資治通鑑』では延熙四年とされている。

7 拙稿1参照。

8 『三國志』卷四十五姜維傳に

維自以練西方風俗，兼負其才武，欲誘諸羌、胡以爲羽翼，謂自隴以西可斷而有也。每欲興軍大舉，費禕常裁制不從，與其兵不過萬人。

とある。

- 9 「晋書」卷一宣帝紀にもほぼ同じ内容の記載がある。
- 10 「三國志」卷二十四孫禮傳を見ると、曹爽との関係が良くなかったことがわかる。このことも影響していた可能性は考えられる。
- 11 「三國志」卷三明帝紀・同裴注所引「魏略」・「晋書」卷一宣帝紀参照。
- 12 ただ、蔣琬が呉と連携を取っていなかったのは、魏の裏をかくために直前まで同盟国である呉の裏もかいておいたほうが良いと判断していたためだと考えることが可能でないことはない。
- 13 三國志卷四十四蔣琬傳には  
於是遣尚書令費禕，中監軍姜維等喻指。  
とあり、岡崎文夫「魏晋南北朝通史」(弘文堂 1932年)には  
このとき蜀都の輿論はむしろ消極的に転向を示したごとく、費禕、姜維の兩人その旨を傳えて蔣琬をさとすに及び、彼はついに涪城(錦州)に徙屯し、軍事方面において姜維を重用し、これをしてもっぱら甘肅方面の守備に當たらしむることにした。  
とある。
- 14 拙稿1参照。
- 15 石井仁「諸葛亮・北伐軍團の組織と編成に一蜀漢における軍府の発展形態」(『東北學學東洋史論集』第四輯1990年)50頁参照。
- 16 「三國志」董允傳裴注所引「華陽國志」には  
時蜀人以諸葛亮，蔣琬，費禕及允爲四相，一號四英。  
とある。
- 17 ただ、安田二郎「西晋武帝好色攷」(『東北大學東洋史論集』第七輯 1998年、のち『六朝政治史の研究』京都大學出版會 2003年 第2章所収)によると、蜀漢の劉禪も孫皓や司馬炎と同様に子女の納宮を介して有力氏族や良家との個別的な結びつきを強化する目的で後宮充實策を行おうとしたという可能性を示唆されており、董允の役割についてはさらなる検討が必要である。
- 18 蔣琬・費禕治世の20年間に大赦は5回施行された。その中で蔣琬の治世(建興十二年〔234年〕～延熙九年〔246年〕)の間に行われた大赦は4回(建興十二年、延熙元年、延熙六年、延熙九年)である。しかし、詳細に見ると、蔣琬が實質的に政權を握っていた9年間には建興十二年と延熙元年の2回(蔣琬政權の成立と改元)しかなく、あとの3回は費禕政權の11年間に行われたことになる。拙稿1参照。なお、拙稿1では校正が間に合わなかったため、蔣琬治世での大赦は3回とあり、延熙元年の大赦が抜けている。ここで改めて訂正させていただく。
- 19 詳細は拙稿1参照。

20 『三國志』卷四十四費禕傳参照。

21 中林前掲論文参照。

22 「漢朝復興」という大義名分だけでは巴蜀の人々がついてこなかったことは、『三國志』卷四十二の諸傳を見れば想像に難くない。

〔表Ⅰ〕蜀漢を中心とした三國の動向と天災・異民族反亂（234年8月～246年11月）

凡例 I：「三國志」魏書・蜀書・吳書はそれぞれ「魏志」・「蜀志」・「吳志」と略す  
 II：年號は蜀漢のもので統一した。魏の景初年間については曆の問題があるが、景初の年代については、平勢隆郎「景初の年代に関する試論」（池田温〔編〕『日中律令制の諸相』2002年3月）参照。ここでは景初元年は西曆237年と考えておく。

年月（蜀漢）	西暦年	事項	典拠
建興12年8月	234年	諸葛亮の死後、楊儀と魏延が争い、魏延討たれる。	【蜀志】後主傳・楊儀傳・魏延傳
		大赦。	【蜀志】後主傳
		左將軍吳懿を車騎將軍・假節・漢中都督とする。	【蜀志】後主傳
		丞相留府長史の蔣琬を尚書令とし國事を統括せしむ。	【蜀志】後主傳・蔣琬傳
		(吳の嘉禾3年) 諸葛恪を丹楊太守とし、山越討伐を行わせる。	【吳志】吳主傳・諸葛恪傳
建興12年		吳は諸葛亮の死を聞くと、魏が蜀を奪い取るのではないかという不安から蜀の救援といざというときの分割に備えて巴丘の兵を一万人増員した。蜀は永安の兵を増員し、また宗預を吳に派遣して対処した。	【蜀志】宗預傳
		諸葛亮が死去すると、吳は是儀を派遣して同盟・友好關係をさらにかためさせる。	【吳志】是儀傳
建興12年9月		朔日、吳では霜が降りて穀物に被害が出た。	【吳志】吳主傳
建興12年11月		吳の黃龍3年（231年）2月から太常潘濬が呂岱とともに五万の兵で武陵の異民族を討伐・平定し、この月武昌へ歸還。	【吳志】吳主傳・呂岱傳・潘濬傳
建興12年		廬陵の叛徒の李桓・（南海郡の）羅厲らが反亂を起こした。	【吳志】吳主傳・呂岱傳
建興13年1月	235年	中軍師楊儀が免職となり漢嘉郡に流される。	【蜀志】後主傳・楊儀傳
建興13年		魏の青龍3年3月以降景初年間にかけて	【魏志】明帝紀・楊阜

		て、許の宮殿の造營や洛陽宮の修理・造營が行われ、楊阜・高堂隆が明帝に諫言。	傳・高堂隆傳
建興13年4月		蔣琬が大將軍・録尚書事、費禕が尚書令となる	【蜀志】後主傳・蔣琬傳・費禕傳
建興13年夏		廬陵の李桓・路合、会稽郡東冶の隨春、南海郡の羅厲らが反亂を起し、詔を受けた呂岱が劉纂・唐咨らを指揮して討伐した。隨春はすぐに降伏して、偏將軍に任命された。	【吳志】吳主傳・呂岱傳
建興13年7月		(吳の嘉禾4年) 吳では雹が降った。	【吳志】吳主傳
建興13年8月		この年の春、孫權が数千家の兵を派遣して江北で田作させる。滿寵は8月に諸屯衛を襲撃・撃破させ、穀物を焼き払わせる。	【魏志】滿寵傳
建興13年		この年、魏の幽州刺史王雄が刺客を送って軻比能を暗殺。	【魏志】鮮卑傳
建興13年		この年、馬岱が出撃したが、司馬懿の派遣した牛金に撃退される。	【晉書】宣帝紀
建興13年		この年、武都の氏族の苻雙、強端が率いる六千人が魏に来降。	【晉書】宣帝紀
建興13年		この年、魏では關東が饑う。	【晉書】宣帝紀
建興14年春	236年	(吳の嘉禾5年) 一つが五百錢に相当する大錢を鑄造し、官吏や民衆から銅を供出させ買い取り、盜鑄の罰則も定めた。	【吳志】吳主傳
建興14年2月		吳の輔吳將軍張昭死去。	【吳志】吳主傳・張昭傳
建興14年		吳では中郎將の吾粲が李桓を捕らえ、將軍の唐咨が羅厲らを捕らえた(2月～夏)。吾粲は会稽の山越討伐にも關与。	【吳志】吳主傳
建興14年7月		高句麗王位官が吳の使者の胡衛らの首を幽州の役所に届ける。	【魏志】明帝紀
建興14年冬		鄱陽の賊徒彭旦らが反亂を起した。	【吳志】吳主傳
建興14年		武都の氏族の王苻健(苻雙の兄?)とその民四百戸あまりを広都に移住させる。	【蜀志】張巖傳, 【華陽國志】卷七劉後主志

		この頃 (234～236年)、陸遜が魏の江夏太守遼式を陥れて罷免に追い込む。	【呉志】陸遜傳
建興15年2月	237年	(呉の嘉禾6年) 陸遜が彭旦らを討伐し、年内に全てを打ち破る。	【呉志】呉主傳
		(中郎將の周祗が鄱陽での徴兵を願い出て、陸遜の反対を押し切って許可を取り付けたが、すぐに呉連らの反亂が起きて周祗は殺された。陸遜が討伐を願い出て出撃し、打ち破って精兵八千人を手に入れ、鄱陽・豫章・廬陵三郡が平定された。)	【呉志】陸遜傳
建興15年6月		(魏の景初元年7月) 呉の朱然らが江夏を包囲したが、魏の荊州刺史胡質・蒲忠らがこれを攻撃したため退却。	【魏志】明帝紀, 【呉志】朱然傳・【呉志】朱然傳裴注所引【異同評】
		以前、呉と高句麗が好を通じて遼東を襲撃しようとしたため、幽州刺史の毋丘儉が遼東の南境に駐屯し、同時に公孫淵を召し寄せようとしたことがあった。この時期に、公孫淵が反旗を翻し雨が續いたこともあって毋丘儉は退却。公孫淵は自立して燕王と称し、年號を「紹漢」とする。	【魏志】明帝紀・公孫淵傳
建興15年		青, 兗, 幽, 冀の四州に命じて海船を作らせる。	【魏志】明帝紀
建興15年8月		(魏の景初元年9月) 冀, 兗, 徐, 豫の四州が洪水に見舞われる。	【魏志】明帝紀
建興15年10月		(呉の嘉禾6年10月) 魏の廬江郡主簿の呂習が投降と城門を開けるといふ内応を申し入れ、呉からは衛將軍全琮と前將軍朱桓が廬江に派遣されたが、呂習の投降が偽りであることがわかり、退却。戦果は挙がらなかった。	【呉志】呉主傳・朱桓傳
建興15年冬		諸葛恪が山越討伐を終えると、北に出て廬江に駐屯し、廬江や皖江で屯田を行い、隙を窺って舒を襲撃しその地の住民を全て捕虜にして連れ歸った。さ	【呉志】呉主傳・諸葛恪傳

		らに壽春の攻略を計ろうとしたが、孫權が許可しなかった。	
建興15年12月		(魏の景初2年正月) 司馬懿が遼東攻撃のため出陣。	『魏志』明帝紀
延熙元年1月	238年	蜀漢は改元, 大赦。	『蜀志』後主傳・『魏志』明帝紀
延熙元年春		(呉の赤烏元年) 呉で一つが一千錢に相当する大錢を鑄造。	『呉志』呉主傳
延熙元年夏		呂岱が廬陵の反亂を討伐。	『呉志』呉主傳
延熙元年7月		(魏の景初2年8月) 燒当の羌王芒中・注詣が叛亂を起こし, 涼州刺史(徐邈)が諸郡の兵を指揮して討伐し, 注詣の首を斬る。	『魏志』明帝紀
延熙元年8月		(魏の景初2年9月) 司馬懿が公孫淵を襄平で包囲し撃ち破り遼東を平定。同月, 蜀漢の陰平太守・廖惇(廖化?)が守善羌侯の宕蕈の營を攻撃。雍州刺史・郭淮が廣魏太守・王贊と南安太守・游奕を派遣して討伐させるが, 游奕の軍は破られ王贊は戦死。	『魏志』明帝紀 『魏志』明帝紀裴注所引王沈『魏書』
延熙元年11月		大將軍蔣琬, 漢中へ出陣し, 開府(←遼東・公孫淵征伐?)。	『蜀志』後主傳・蔣琬傳
		(魏の景初2年12月) 6月に倭からの使者が帯方郡に着き, 洛陽に送られ, この月になって「親魏倭王」の卑弥呼に詔書が下る。	『魏志』東夷傳
延熙元年12月		(魏の景初3年正月1日) 魏の明帝崩御。曹芳が帝位に就き, 大將軍・曹爽と太尉・司馬懿が補佐する。	『魏志』明帝紀・齊王紀・曹爽傳
延熙元年		呉では中書典校の呂壹が公文書を監査する権限を利用して権力を振るい, ささいなことやでっち上げた事件で人々を陥れていたが, この頃に悪事が発覚して誅殺された。	『呉志』呉主傳・顧雍傳・諸葛瑾傳・步騭傳・陸遜傳・潘濬傳など
延熙2年1月	239年	(魏の景初3年2月) 司馬懿が太傅となる。	『魏志』齊王紀・曹爽傳
延熙2年3月		蔣琬が大司馬に昇進し, 姜維は大司馬	『蜀志』後主傳・蔣琬

		府司馬となってたびたび羌中など西方へ侵入。	傳・姜維傳
		(呉の赤烏2年) 使者の羊衝と鄭胄、將軍の孫怡を遼東に派遣して魏の守將張持・高慮らを撃ち、その配下の男女を捕虜とした。	『呉志』呉主傳
延熙2年9月		(魏の景初3年10月) 魏の鎮南將軍・黄權が車騎將軍となる。	『魏志』齊王紀
延熙2年10月		呉で將軍の蔣秘が南の異民族を討伐したが、配下の廖式兄弟が反亂を起こし、零陵・桂陽・交州・蒼梧・鬱林諸郡が不安定になったが、呂岱・唐咨によって一年余りで鎮圧されている。	『呉志』呉主傳
延熙3年春	240年	越雋太守の張疑に越雋郡を平定させる。	『蜀志』後主傳
		魏は早(景初3年12月～正始元年3月)。	『魏志』齊王紀
延熙3年4月		魏の車騎將軍・黄權死去。	『魏志』齊王紀
延熙3年11月		呉は饑う。公の倉庫を開いて貧窮者を救済。	『呉志』呉主傳
延熙3年		姜維が隴西に出陣。郭淮は軍を進めて疆中まで追撃し、姜維は退却。郭淮はそのまま羌族の迷当らを討伐。従順な氐族の三千余部落を鎮撫し、關中に強制移住させる。	『魏志』郭淮傳
延熙4年	241年	蔣琬、漢水ぞいに川下り作戦を計画し、魏興・上庸攻略をはかる。	『蜀志』蔣琬傳
延熙4年1月		呉では大雪、平地でも三尺積もる。	『呉志』呉主傳
延熙4年4月		衛將軍全琮が芍陂に侵入し、威北將軍諸葛恪は六安を攻め、車騎將軍朱然らの率いる五万の軍勢が襄陽郡の樊城を包囲(『三國志』卷四本文では五月)、大將軍諸葛瑾・驃騎將軍歩騭が祖中に侵入した。魏は、王凌・孫禮・胡質らを派遣して防ぎとめる。	『魏志』齊王紀・孫禮傳・胡質傳・王凌傳、齊王紀裴注所引干寶『晉紀』、『呉志』朱桓傳附朱異傳、『晉書』宣帝紀
延熙4年5月		呉の太子孫登死去。	『呉志』呉主傳・孫登傳
延熙4年6月		全琮が退却した後も樊城の包囲は厳しかったため、六月に司馬懿自らが出陣	『魏志』齊王紀裴注所引干寶『晉紀』、『晉

		して朱然らを撃退。	書] 宣帝紀
延熙4年10月		蔣琬・費禕会談。	【蜀志】後主傳
延熙5年1月	242年	姜維, 偏軍を率い漢中より涪県に歸り, 駐屯。	【蜀志】後主傳
		馬忠, 蔣琬に詔勅を傳える。	【蜀志】馬忠傳
延熙5年3月		魏は正始2年からこの月にかけて, 廣漕渠を開き淮北を灌漑する(長江・淮水へ軍を動かす際にも使用)。	【晉書】宣帝紀・【魏志】鄧艾傳
延熙5年		(魏の正始3年) 高句麗王位官が西安平に侵入して略奪を働く。	【魏志】東夷(高句麗)傳
延熙5年		(吳の赤烏5年) 建安・鄱陽・新都で山民が反亂を起こし, 鍾離牧らが鎮圧。また, 合浦郡高涼の賊・仍弩, 南海郡揭陽の曾夏らが反亂を起こすが, いずれも鍾離牧が鎮圧。	【吳志】鍾離牧傳, 同傳裴注所引『会稽典錄』
延熙6年9月	243年	(魏の正始4年) 司馬懿が舒で諸葛恪を撃つ。	【晉書】宣帝紀
延熙6年10月		大司馬蔣琬, 漢中より歸途につき, (重態に陥ったため?) 涪にとどまる。	【蜀志】後主傳・蔣琬傳
		姜維, 鎮西大將軍・涼州刺史となる。	【蜀志】姜維傳
延熙6年11月		蜀漢で大赦。	【蜀志】後主傳
		費禕, 大將軍・録尚書事に昇進。	【蜀志】後主傳・費禕傳
延熙6年12月		魏では卑弥呼の使者が朝貢。	【魏志】齊王紀
延熙6年		魏では淮陽渠・百尺渠を開き, 潁の南北の諸陂を修理する。	【晉書】宣帝紀
延熙7年閏月	244年	(魏の正始5年2月) 曹爽, 夏侯玄らが司馬懿らの反對を押し切って蜀へ出陣。蜀漢は費禕, 王平を中心に漢中を防衛。曹爽は5月に魏へ歸還(これにより蔣琬と費禕の閔歴・声望が並ぶ)。	【魏志】齊王紀・曹爽傳・夏侯玄傳・郭淮傳, 【蜀志】後主傳・王平傳・費禕傳, 【晉書】宣帝紀
延熙7年9月		費禕, 成都に歸還。	【蜀志】後主傳
		費禕, 領益州刺史となる(～12月)。	【蜀志】費禕傳・【華陽國志】劉後主志
延熙8年	245年	吳で太子(孫和)派と魯王(孫霸)派の對立激化で, 張休が自殺。	
延熙8年2月		吳の丞相・陸遜, 死去。	【吳志】吳主傳・陸遜傳

延熙8年7月		呉で將軍の馬茂が反亂を起こすが、鎮 壓される。	【呉志】呉主傳
延熙8年8月		呉で校尉の陳勳に屯田兵と工兵三万を 率いて句容中道に運河を掘り小其から 曲阿の雲陽西城を結んで、そこに商人 の交易場を配置して食糧倉庫を建てさ せた。	【呉志】呉主傳
延熙8年12月		費禕，漢中守備視察。(後継者として のデモンストレーション?)	【蜀志】後主傳
延熙9年1月	246年	呉が粗中に侵入。司馬懿は再び攻撃さ れることを懸念し軍を留めて沔水の南 で防ぐことを進言するが、曹爽は従わ ず。果たして攻撃を受け、萬人を超え る被害を出す。	【呉志】呉主傳・『晉 書』宣帝紀
延熙9年2月		魏の幽州刺史・毌丘儉(・王頎)が高 句麗討伐(正始5年~7年)。	【魏志】齊王紀・毌丘 儉傳・東夷(高句麗)傳
延熙9年5月		毌丘儉が濊貊討伐。	【魏志】齊王紀
延熙9年6月		費禕，成都に歸還。	【蜀志】後主傳
延熙9年秋		大赦。	【蜀志】後主傳
延熙9年11月		蔣琬死去。	【蜀志】後主傳・蔣琬 傳